江戸後期の庄内の文人文化

― 金峯山空賢院の「蓮社」とその周辺 ―

酒井家庄内入部400年記念

七絃琴復興プロジェクト代表

山澤昭彦

山澤昭彦：プロフィール　A・COMPANY

山形県鶴岡市出身。1946年生まれ。尺八を学生時代に青木静夫（二代青木鈴募）・横山勝也の各氏から学ぶ。
プログラム言語を使って音楽を生成する「Generative Music」のアルバムを多数制作、近年はコンピュータを使った映像作品と生成音楽を組み合わせた「実験音楽工房展」を東京などで開催したほか、尺八古典本曲の演奏や多ジャンルのミュージシャンやダンサーとのコラボレーションなど、複合的なアート活動にも取り組んでいる。

2011年「実験音楽工房 A･COMPANY」プログラムによる生成音楽 制作開始
2012年「音系・メディアミックス同人即売会 M3」出展（2012 - 2015年）
2015年「実験音楽工房展 2015」東京・山形
2016年「実験音楽工房展 2016」東京・山形・鶴岡
2017年「実験音楽工房展 2017」東京・鶴岡
2018年「県立鶴岡南高等学校吹奏楽研究会 50周年記念コンサート」企画開催
2019年「鶴岡水上の音楽祭」芸術監督
2019年「尺八と生成映像による 観音」ライブシリーズを開始
2020年「佳興の会」をプロデュース 現在も年4回の邦楽ライブを開催中
2020年「アンサンブル・チコーニア」結成 活動開始
2020年「K×I×Y 三人展 vol.1 - 時の断片 -」SoundScape 2020
2021年「酒井家庄内入部400年記念事業 七絃琴復興プロジェクト」代表
2021年「K×I×Y 三人展 vol.2 - 時の戯れ -」フラクタルの樹・家具の音楽
2022年「酒井家庄内入部400年記念事業 芸術祭参加」音楽絵巻 その2
2022年「K×I×Y 三人展 vol.3 - 時の覚醒 -」四字熟語・ピアノのための響
2023年「鈴木順子×山澤昭彦 二人展 MindScape」@ 鶴岡アートフォーラム
2023年「山澤昭彦とその界隈」@ TACTおとアート2023
2024年「鈴木順子×山澤昭彦 二人展 CosmicEgg」@ 御茶ノ水 Gallery 蔵
2024年「Sa･Kura Music Week 2024」@ 御茶ノ水 Gallery 蔵



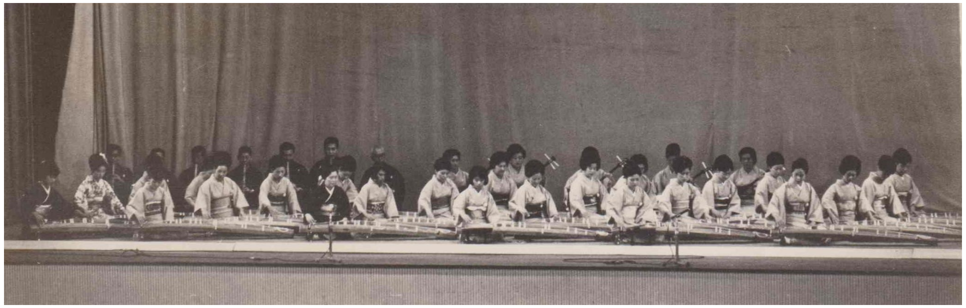


ノヴェンバー･ステップス

1967年11月9日、作曲家の武満徹による琵琶、尺八とオーケストラのための作品「ノヴェンバー・ステップス」が、ニューヨークで初演された。この作品はニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団の創立125周年の記念作品として、武満に委嘱されたもの。初演は、小澤征爾が指揮するニューヨーク・フィルと、鶴田錦史の琵琶、横山 勝也の尺八により、同楽団の本拠地であるフィルハーモニック・ホール（現デイヴィッド・ゲフィン・ホール）で催された。横山勝也（1934年 - 2010年）は、尺八の世界で知られた家柄に生まれ、24歳で上京して尺八を海童道祖らに師事。1988年に「国際尺八研修館」を創設。国際尺八研修館は英語による指導を行う講師陣をそろえ、日本の伝統文化のなかで最も国際的になっていると言われている尺八を国内のみならず海外でも広く普及させる事に重要な役割を果たしている。



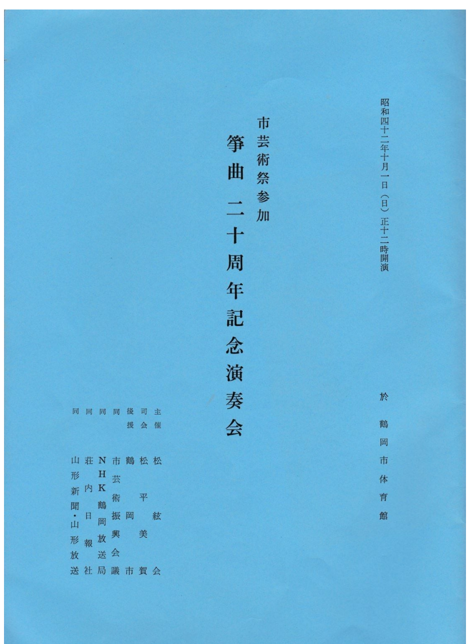




六段



千鳥の曲



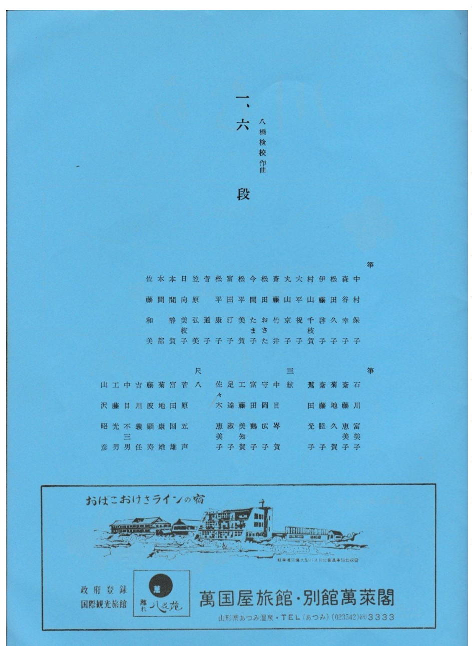
市芸術祭参加

箏曲 二十周年記念演奏会

昭和四十二年十月一日（日）正十二時開演

於 鶴岡市体育館

主催 松紘会
司会 松平美賀
後援 鶴岡市
同 市芸術振興会議
同 NHK鶴岡放送局
同 荘内日報社
同 山形新聞・山形放送



一、六段 八橋検校作曲

箏
中村保子 森谷幸子 松田久子 伊藤啓子 村山千枝賀 大平祝子 丸山京子 斎藤竹井 松田おさた 今間たまき子 松平美賀 富田汀子 松平康子 菅原道子 笠原弘美 日向美枝子 本間静賀 本間都 佐藤和美

箏
石川富美子 斎藤恵美子 菊地久賀 斎藤睦子 鷲田光子

三絃
中目岑賀 守岡広子 富田鶴子 工藤美知賀 足達淑子 佐々木恵美子

尺八
菅原五声 富田国雄 菊地康雄 藤波顕寿 吉川義任 中目不三男 工藤光男 山沢昭彦

松紘会「二十周年記念演奏会」 1967年10月1日（日）12:00　鶴岡市体育館

Spring Joint Concert

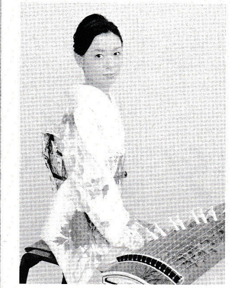
第1部 門下生による演奏

- さくら・かぞえうた（佐藤義久）
- 宮城道雄小曲集より 一番星二番星（宮城道雄）
- 宮城道雄童謡集より ピョンピョコリン（宮城道雄）
- 吾妻の曲（古典本曲）
- 六段の調（八橋検校）
- 夕顔（菊岡検校）
- ままの川（菊岡検校）
- 千鳥の曲（吉沢検校）
- あこがれ（沢井忠夫）
- ことうた 民謡（水野利彦）
- 九州鈴慕（古典本曲）
- 宮城道雄小曲集より 君のめぐみ（宮城道雄）
- 宮城道雄小曲集より 岩間とぢし（宮城道雄）
- 宮城道雄小曲集より うぐいすの（宮城道雄）
- 宮城道雄小曲集より 練習曲22番（宮城道雄）
- 郷音（水川寿也）
- 岬の燈台（野村正峰）
- 花筏（沢井忠夫）
- 高麗の春（宮城道雄）
- 軒の雫（宮城道雄）
- ガジュマル（小田誠）
- 春の夜（宮城道雄）
- オード（頌詩）II（広瀬量平）
- 舞踏曲（宮城道雄）

第2部 寺井結子×黒田鈴尊 Duo Concert

どうぞお楽しみに♪

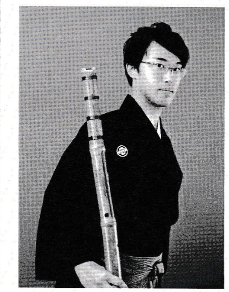
※曲目・曲順は変更になる場合がございます



©Ayane Shindo

寺井結子 Yuiko TERAI

葛飾区在住。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。在学中宮城賞、同声会賞受賞。同大学院音楽研究科修士課程修了。NHK 邦楽技能者育成会第 55 期修了。第 17 回賢順記念くるめ全国箏曲祭コンクール第 2 位受賞。NHK 邦楽オーディション合格。NHK-FM「邦楽のひととき」「邦楽百番」出演。「和楽器ルネサンス」（2018 年）にて一柳慧作曲『密度』を、「ぎふ未来音楽展」（2019 年）にて『秋の連歌 ― 箏独奏のための ―』『臨界域 ― 三絃独奏のための ―』を演奏し作曲家自身の助言を受け研究、研鑽を積む。これを契機に一柳氏の音楽に共感を覚え、2021 年秋に CD「寺井結子プレイズ一柳慧邦楽作品集」（カメラータ・トウキョウ）を発売。新聞や雑誌にて幅広く掲載される等、好評発売中。
古典から現代作品まで幅広く取り組むと同時に、邦楽の普及のための教育活動も積極的に行い、日本独自の音楽の魅力を広めるために活動している。
生田流箏曲宮城社大師範。（公社）日本三曲協会所属。https://yuiko-terai.com/



©Ayane Shindo

黒田鈴尊 Reison KURODA

人間国宝・二代青木鈴慕、三代青木鈴慕に尺八を師事。早稲田大学人間科学部、東京藝術大学音楽学部卒業、同大学院修士課程修了。
NHK 邦楽オーディション合格。
韓国・百済文化祭にて朴範薫作曲の尺八協奏曲 “流” のソリスト。
2015 年山本和智作曲の尺八協奏曲 “Roaming liquid” を東京と神戸で世界初演。
CAPCOM「大神 五重之音調」CD 録音発売。
以降 CD、TV、ラジオなどに音源提供多数。
2016 年第二回利根英法記念邦楽コンクール最優秀賞受賞。NHK E テレ「にっぽんの芸能」出演。
東京コンサーツ主催による完全無伴奏の 1 人舞台 "黒田鈴尊 独演会" を以降毎年開催。
同年、ベルギー・ARS MUSICA にコンチェルトのソリストとして招請され、武満徹作曲 "November Steps" や、Claude Ledoux、Denis Levaillant の新作尺八コンチェルトを世界初演他、ソロコンサートが開催され好評を博す。
国際尺八コンクール 2018 in London 優勝。
アンサンブル室町（第 13 回佐治敬三賞受賞）、邦楽四重奏団（NHK FM 邦楽のひととき出演。1stCD「野田暉行邦楽作品集」をコジマ録音 / ALM RECORDS より発売。"レコード芸術" 2016 年 12 月号にて特選盤、"音楽現代" 2017 年 1 月号にて推薦盤を獲得。）メンバーとして数多くの新作を初演し続けながら、尺八の “今とこれから”、無限の可能性を追求している。
令和元年度文化庁文化交流使。reisonkuroda.com

2025 年 3 月 23 日（日）
11：00 開場 / 11：30 開演
入場無料

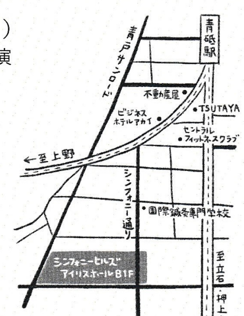
かつしかシンフォニーヒルズ
アイリスホール

〒124-0012
東京都葛飾区立石 6-33-1

TEL：03-5670-2222

京成青砥駅下車徒歩 5 分
（又は京成立石駅下車徒歩 7 分）

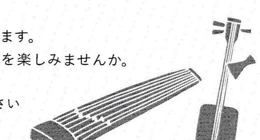
京成バス（新小 52・53 系）
「文化会館」下車



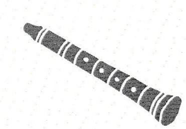
【お問合せ　結の会】 事務局：090-4552-9237
Email：yuiko.terai@gmail.com

箏・三絃教室

＊初心者から経験者まで対応します。
世代の幅を越えて一緒に音楽を楽しみませんか。
（稽古場：葛飾区内。
詳細は HP よりお問合せください
https://yuiko-terai.com/）



尺八教室



＊門下生、随時募集中です。
古典から歌謡曲、クラシックなど、
尺八で一緒に吹いてみませんか。
（稽古場：荒川区内。
連絡先：keikuroda88@gmail.com）



庄内藩または荘内藩は、江戸時代の出羽国（現在の庄内地方）を知行した藩。譜代大名の酒井氏が一貫して統治した。　藩庁は鶴ヶ岡城（鶴岡市）で、枝城として亀ヶ崎城（酒田市）を置いた。小藩としては異例となる２城を持つ。支藩に大山藩・松山藩がある。江戸幕府による転封が一度もなかった数少ない大名の一つ。庄内藩は、藩主・家臣・領民の結束が極めて固かった。

初代 酒井忠勝（ただかつ）1622年（元和8）～ 1647年（正保4）　酒田の亀ヶ崎城に代えて鶴ヶ岡城を居城と定める
７代 酒井忠徳（ただあり）1767年（明和4）～ 1805年（文化2）　藩校致道館を創設　天明の大飢饉
８代 酒井忠器（ただかた）1805年（文化2）～ 1842年（天保13）天保の大飢饉　天保義民事件





江戸後期の庄内絵図

「正保庄内絵図」が本間美術館（酒田市）に所蔵されている。この絵図は、正保元年（1644）に江戸幕府が諸大名に対して国絵図の提出を命じた時、庄内藩で作成した領内絵図「庄内三郡絵図」（致道博物館蔵）を、寛政3年（1791）に写したものと考えられる。





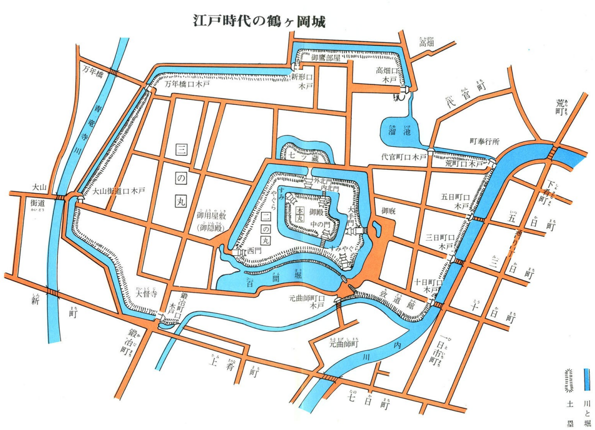
亀ヶ崎城:酒田市

酒田は、最上川と日本海を結ぶ河口の港町で、幕府の領地の御用米や庄内藩などの藩の御用米が集められていた。亀ヶ崎城は大宝寺義氏に謀反を起こした東禅寺義長が城主をつとめた東禅寺城が前身で、庄内地方の支配は義長を支援した最上氏と、大宝寺義勝を擁する上杉氏の間で争われた。「関ケ原の戦」後は最上義光の所領となり、亀ヶ崎城と改名。最上氏改易後、旧最上領は分割され、酒井忠勝が転封され庄内藩が成立、亀ヶ崎城は支城として残った。



鶴ヶ岡城:鶴岡市

鶴ヶ岡城は、室町時代初期、武藤長盛による築城が始まりといわれており、古くは大宝寺城と呼ばれた。1601年には、山形の最上氏による庄内支配の拠点となり、その2年後に鶴ヶ岡城に改称された。1622年、信州松代より酒井忠勝が入部して以降、藩主酒井氏は、1871年の廃藩置県まで12代・約250年に亘ってこの地を治め、その治世の間、鶴ヶ岡城が酒井氏の居城となった。

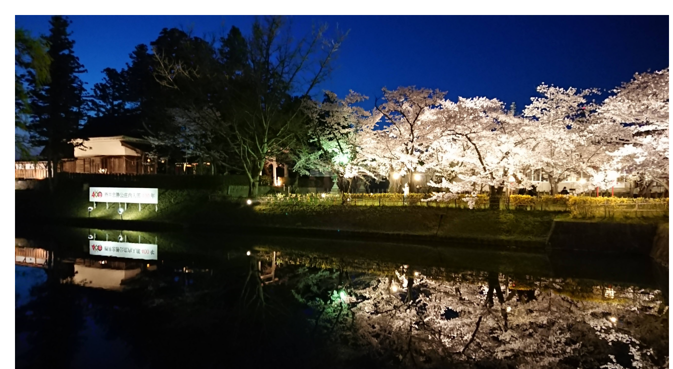




庄内藩の城下町「鶴岡」は、鶴岡出身の作家「藤沢周平」の小説の舞台である北国の小藩「海坂藩」のモデルとなっている。海坂藩に出てくる町名などは、現在の鶴岡市の町名などにマッピングできるという。

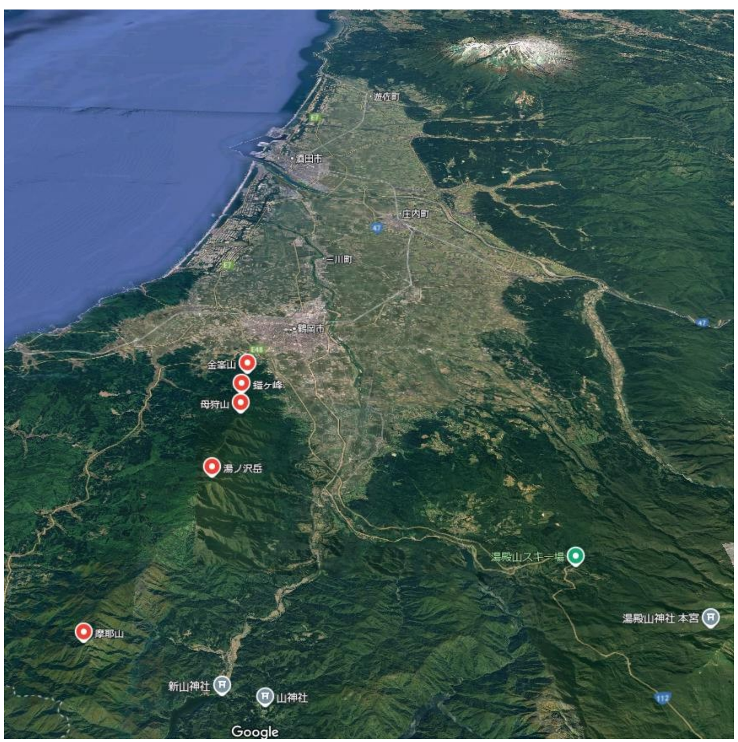


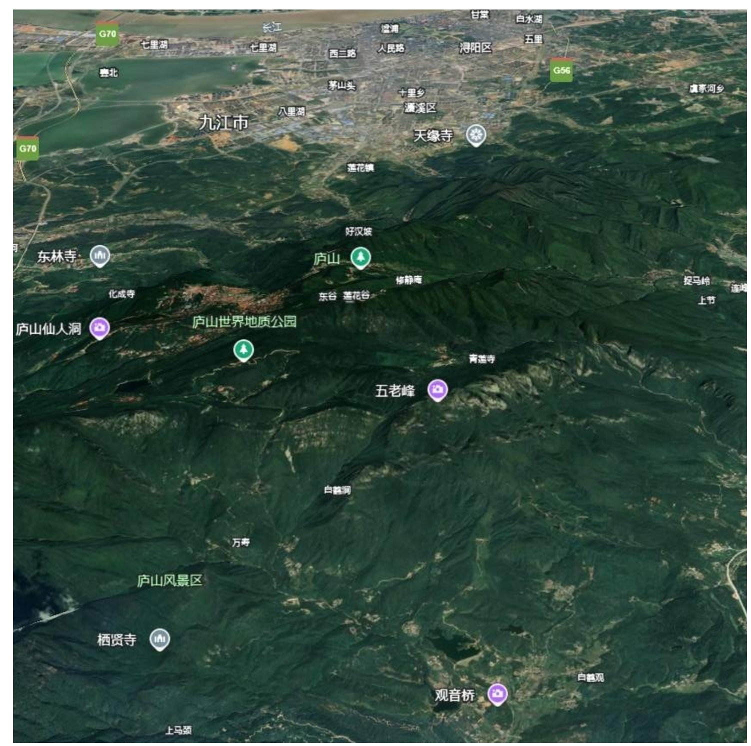




鶴岡の南山「金峯山」

鶴岡市の南に「瘞琴碑」で有名な「金峯山」がある。標高471mで、国指定名勝、庄内海浜県立自然公園にも指定されている。中国の文人、陶淵明の「飲酒」という詩の一節に『採菊東籬下 悠然見南山』というのがある。故郷に帰り、自然と一体になって暮らす心境を詠んだものだ。詩中の「南山」とは、中国江西省九江市の南にある名山「廬山」のことで、「金峯山」も鶴岡の南にあることから、中国の「廬山」にも例えられている。金峯山は朝日連峰の北西端から伸びている尾根の北端で、「摩耶山・湯ノ沢岳・母狩山・鎧ヶ峰・金峯山」の5つの峯が連なる。かつて、この地は修験道の舞台だった。中国の「廬山」には「五老峰」という峰々があることから、「金峯山」に連なる５つの峯もまた「五老峰」に例えられる。





金峯山と「空賢院」

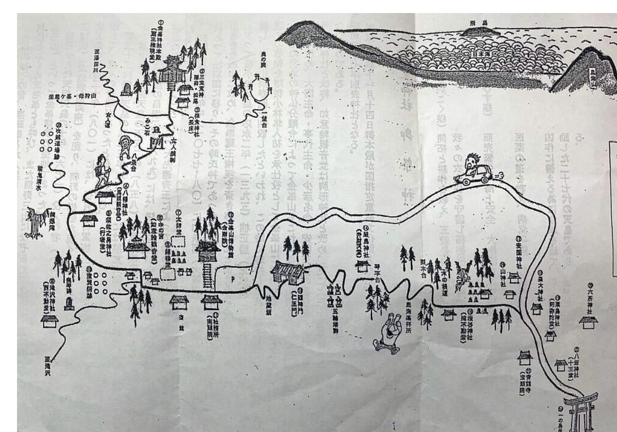
鶴岡市街から真近に望まれる「金峯山」（471m）は、671年（天智10）に役小角が開山したと伝わる。古くは八葉山とか蓮華峰とよばれていたが、承暦年間（990-995年）に大和国宇多郡から当地に移った丹波守盛宗が紀州吉野金峯山蔵王権現を勧請してから「金峯山」に改められたと言われる。以前は「金峰山」と表記されていたが、2019年に地元からの要望を受けた鶴岡市が国土地理院に申請「金峯山」に改められ、読み方も「きんぼうさん」から「きんぼうざん」となった。奥州藤原氏はじめ歴代の領主が崇敬し、江戸時代には庄内藩の祈願所とされた。神仏習合の時代には真言宗の修験道場として栄えていた。「金峯神社」は明治の神仏分離までは「金峯山蔵王権現」と称し修験道場となっていたが、明治の初めの神仏分離令によって金峯山もこれに従い、蔵王権現堂（山頂本堂）を御嶽神社と改め、大国主命・事代主命・少彦名命・安閑天皇の四柱をご祭神と定め、明治13年金峯神社と改称、如意輪観音堂は胸形神社と改め、更に大正15年に金峯神社「中の宮」となった。山麓の青龍寺は真言宗の寺院として金峯神社から分離した。

江戸時代後期、金峯神社中の宮の地には、荘厳な堂塔伽藍が立ち並び、庄内における学芸・文雅の一大中心地だった。蔵王坊「空賢院」は、現在の金峰中の宮斎館の地に、北の坊「金剛院」は金峰博物館の位置に、南の坊「南頭院」は今の社務所のある場所にあった。









空賢院のサロン「蓮社」

江戸時代の後期、中国の廬山に例えられる鶴岡の「金峯山」は、庄内の文人文化の中心地だった。通寛上人が住んだ「空賢院」（現在の「中の宮斎館」の場所にあった）には、庄内藩の文人達が集い、まるで文芸サロンのような状況だったという。空賢院のサロンは「蓮社」と呼ばれていたが、この名前は、廬山に東林寺を建てた中国の高僧「慧遠」のサロン「白蓮社」を意識して名付けられたのではないだろうか。このサロンに集った中に「相良儀一」という文人がいた。瘞琴碑には、琴の名手だった相良儀一と通寛上人との友情の物語が刻まれている。空賢院のサロン「蓮社」に集まった文人達が作った漢詩が、「蓮社追懐集」という詩集に纏められている。この中に、相良儀一が「空賢院」のことを詠んだ詩がある。この詩は、中国の「虎渓三笑」の故事を引用しており、「蓮社」に集っ庄内藩の文人達は「古文辞学」を熟知していたことが判る。

遠公精舎廬山嵋
樹梢鐘声暮景遅
飛塔雨来烟点綴
偃松春老影参差
人間世事消三笑
空裡禅心観六時
深坐欲尋玄妙理
月光偏照白蓮池

「蓮社」に集う文人達

金峯空賢院の「蓮社」のメンバーは、庄内藩の文人藩士達だった。空賢院は現在の「中の宮斎館」の場所にあった。近くには「閼伽井の清水」がある。住職の通寛上人は、集まった藩士たちに次のような賛辞の詩を送っている。

同人相い訪う 白雲の隈　琴と酒と 悠然として 世埃を絶す
想い得たり 廬山 幽賞の趣　風流　又　追陪を得たるを喜ぶ

蓮社の主なメンバー

白井矢太夫	(1753-1812)	庄内藩士･致道館祭酒･儒学者
白井重固	(1771-1833)	庄内藩士･致道館学監･儒学者･書家
石川朝陽	(1762-1835)	庄内藩士･致道館祭酒･儒学者
塙伊助	(1758-1805)	庄内藩士･致道館司書･書家
相良儀一	(1757-1804)	庄内藩士･琴士
白井弥平	(1772-1833)	庄内藩士･致道館助教･儒学者
重田道樹	(1752-1811)	庄内藩士･致道館助教･藩医･書家
菅基	(1780-1819)	庄内藩士･致道館助教･儒学者･画家
加藤正従	(1771-1834)	庄内藩士･致道館司書･書家
氏家龍溪	(1775-1834)	庄内藩士･致道館司書･画家･書家･琴士



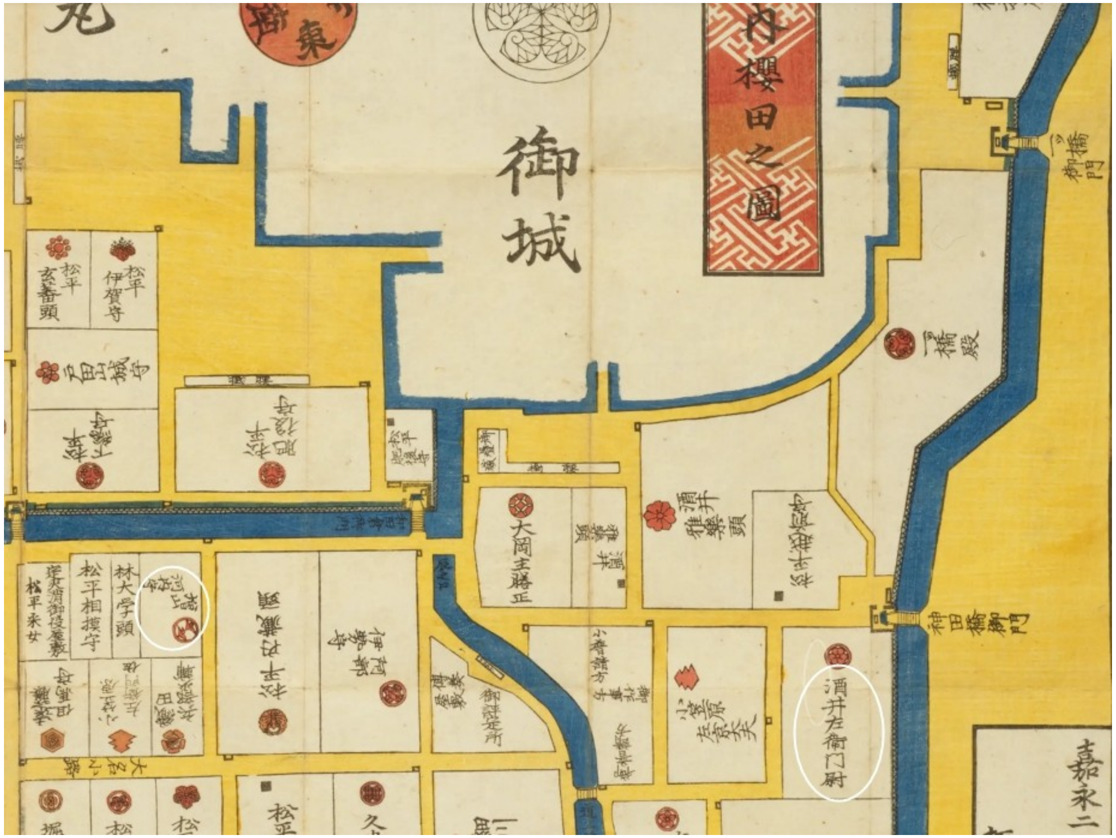
庄内藩の江戸藩邸

庄内藩主の酒井家は「酒井左衛門尉」家と呼ばれる名門で、江戸藩邸（上屋敷）は江戸城の近く（現在の大手町）にあった。「瘞琴の碑」に名を刻む古琴の名手「相良儀一（1757-1804年）」が琴を学び始めたのは地元の庄内だと思われるが、江戸で勤務していた時に、浅草真龍寺の釋胤禅師（蘭室）からも学んでいる。相良儀一は、1794年と1802年の２度、江戸勤番になり江戸に来ている。

また、琴士「増山雪斎」からも琴を学んでいたのではないかと思われる。

雪斎は伊勢長島藩主「増山河内守」のことで、風雅を愛でた文人大名として知られていた。雪斎は、花鳥画を得意とし、また文人画風の山水図も画いた。増山河内守の江戸藩邸は酒井家の江戸藩邸の近くだった。

酒井家の江戸藩邸は、大手町の「上屋敷」の他、神田泉町に「中屋敷」があり、浅草橋にも「下屋敷」があった。



増山雪斎と「相良儀一」

三重大学の広報誌『ウェーブ三重大』の第38号（2008.7発行）の19ページに、相良助右衛門（儀一）が、最初に江戸に勤務した時に増山雪斎の屋敷を訪れた時の逸話が載っている。この時の相良儀一の任務は、庄内藩の支藩「松山藩」の世継の教育係だった。相良儀一は、文武両道に優れていたことが判る。この逸話は庄内藩士で国学者だった池田玄斎の著書『弘采録』の「増山雪斎侯の事」の中に記述されている。



寛政6年（1794）初めて江戸に出た出羽松山藩士相良助右衛門は、ある日、とある大名屋敷を訪れた。通された座敷に、助右衛門は目を見張る。

座敷は、残らず中国風で、亀甲石を敷き、壁は漆喰で塗られてことのほか美しい。長押には中国製（あるいは中国風）の山水画花鳥画の額や硝子絵など珍しい画が掛けてあった（※1）。

硝子絵は、透明なガラスに裏側から主に油彩で風景や花鳥・人物を描き、表から透明感を楽しむ。中国の広州で作られ、主に西欧に輸出され、日本にももたらされた。ともあれ、助右衛門はいきなり中華空間に投げ込まれたのである。おまけにこの家の主は、曲彔（※2）に腰掛けて彼を迎えた。主の名は増山正賢（※3）、三重県桑名市にあった伊勢長島藩第5代藩主で、雪斎の号で知られる。初対面にもかかわらず、主は馳走で助右衛門をもてなしたが、器から箸に至るまで中国からの輸入物で取り揃えるという徹底ぶりに、助右衛門は舌を巻いている。残念なことに彼自身このときは体験できなかったが、懇意になると中国風のコスチュームに身を包んだ女中が給仕に当たることもあったという（※4）。

雪斎は、生前、高名な文人として尊敬を集めていた。相撲番付に見立てて当時出版された“文人番付”では、大関（当時は横綱ではなく大関が最高位）を超える地位、行司に充てられたほどである。囲碁・書・煎茶に関する著作があり、中華文化に対する造詣の深さがわかる。また、儒学に関する著述もあり、儒教的教養人としての学識もうかがわせる。

西欧諸国をモデルとして近代化が進められるようになる明治より前には、中華文化は精神生活の理想と捉えられることが多かったが、それに飽きたらず日常生活に至るまで中華尽くしという人は多くない。経済的裏付けを必要としたことも一因である。もっとも2万石の小藩の台所は、ために火の車であったらしい。

雪斎は多芸多才の文人であったが、今日、最も評価されるのは画である。とりわけ花鳥画の評価が高い。

春木南湖「増山雪斎像」

増山 雪斎 ましやま せっさい

1754年－1819年

増山雪斎は、宝暦4年（1754）伊勢国長島藩主の長子として江戸に生まれ、23歳で所領2万石を襲封した。名は正賢（まさかた）、雪斎はその号である。雪斎の芸域は、多方面におよんでおり、著作を取り上げると、囲碁、煎茶、儒学、博物学、書などに広がっている。雪斎は花鳥画を最も得意としたと言われるが、その花鳥画はいずれも華麗な色遣いと写実的な形態描写を特徴としている。

享保16年（1731）、中国浙江省から一人の画人が長崎を訪れた。名を沈南蘋という。南蘋の画は、鹿・猿・兎・鶴・鳳凰・孔雀などの走獣や鳥を花卉と取り合わせて濃厚華麗な色彩で描いた写実的な花鳥画が主で、その影響は、江戸時代後期、雪斎の時代になるとほぼ全国に拡がり、のちに南蘋派と称される一大画派を形成するようになった。雪斎は、今日、南蘋派を代表する画人の一人に数えられる。

今回紹介する雪斎の「黄蜀葵に翡翠図」は、紅色の小花を咲かせるサルスベリ、トロロアオイとカワセミという夏の景物が取り合わされた花鳥画で、南蘋派の作風をよく示している。その一方で、夏の強い日差しを白く透かすトロロアオイの軽やかな表現やカワセミの羽毛の繊細巧緻な描写には、雪斎固有の洗練された感性もうかがえる。流行の最先端を行く中華モダンのお洒落な画、同時代の眼にはそんなふうに映ったはずである。

深い教養と洗練された感性で中華文化に親しむ文人雪斎に、「風流抜群の人」（※5）、「風流自在」（※6）などと、当時の人は讃辞を贈っている。

（※1）池田玄斎『弘采録』（文化11年（1814）序・酒田市立図書館蔵）所載の「増山雪斎侯の事」の一部を現代語に訳出。「増山雪斎侯の事」は、庄内藩士の著者が支藩松山藩士相良助右衛門からの聞き書きをまとめたもの。
（※2）鎌倉時代に中国から渡来して主に禅宗で使われた椅子。
（※3）“増山”は、“ますやま”ではなく“ましやま”と読む。
（※4）※1に同じ
（※5）雲室『雲室随筆』文政10年（1827）
（※6）金井烏州『無声詩話』嘉永6年（1853）

1783年（天明3）、増山雪斎は伊勢長島城内に独楽園を造成した。園内の「迎香」と名付けられた亭は、詩文集や諸子百家、風流の書を置いた書斎だった。園名の独楽園は、北宋の司馬光が洛陽での閑居時代に造園した「独楽園」に依っている。この折に制作された『独楽園賀詞帖』には掲載されていないが、庄内藩士の「白井重行」「渡部種徳」「重田道樹」が独楽園を詠んだ賀詞が残っている。三名はいずれも「蓮社」のメンバー。雪斎は庄内藩の文人と深いつながりを持ち、庄内藩の文化に大きな影響を与えていた。

寄題 長島侯独楽園 （重田道樹）

長島浮烟多度雲 晩風吹払海天分 座右図書映東壁 亭中杯酒対西曛
弾琴竹苑禽来舞 洗筆蓮池鶩作群 園成総厭今時客 更有前賢能楽君

酒井家と増山家は少なからず縁がある。庄内藩の第8代藩主酒井忠器の次男哲次郎は、1842年に長島藩主の増山正寧の養子となり、増山正修となっている。

相良儀一と「瘞琴碑」

相良儀一は諏訪部家の末子として酒田で生まれた。少年の頃から優秀だったが、後に鶴岡に移り25歳の時に、相良家の婿養子となった。相良家の祖先は、武田信玄の家臣で由緒ある家柄だった。2回目の江戸勤務になったのは、庄内藩の第7代藩主酒井忠徳の弟の酒井忠順付となった1802年のことだった。2年後の1804年には新たな役職に就くために庄内に戻ったが、この年に48歳で急逝した。矢場で弓を引き絞った時の事だった。相良儀一の死は、金峯空賢院の通寛にとって大きな悲しみだったに違いない。
庄内藩の藩校「致道館」が開校したのは、翌年の1805年である。1813年、通寛上人は金峯空賢院から鶴岡龍覚寺に転住となった。これにより空賢院の文芸サロン「蓮社」も終焉を迎える。

通寛は去るに当たり、西谷（空賢院を下った場所にある）に相良儀一の遺琴を瘞め碑を建てることを発意する。しかし、通寛は、この4年後の1817年に亡くなった。瘞琴碑も碑銘の撰したのは菅基（1780-1819年）で、伊織、南風館と号し、また金峯の雅称五老峰にちなんで五老山人とも号した。藩校致道館創設時には、20代の若さで普請取締役となり開校とともに助教となるが、菅基も1819年に享年40で亡くなっている。
瘞琴碑の右側を見ると、次のような追書が刻まれている。

「通寛師、文化10年（1813年）を以て事を肇め石を修し、額字すでに成れども未だ功をえずして没す。石の西谷に捨てらるること十八年、漸く苔蘚を生ず。今茲文政13年（1830年）、空賢院の快全金剛院の文良、先師の志を継ぎ、而うして功成る。額字を書けるもの白井重固、事を幹し成すに賛せるもの池田礼儒、坂尾萬年。資を捐て費 を助けしもの西海幸重、鐙谷重正なり。 石工長四郎宗賢 刻す」

通寛が「蓮社」での交友の記しとして構想した「瘞琴の碑」の遺志は、友人および弟子僧に受け継がれ、17年目にして漸く実現したのだった。



荻生徂徠と藩校「致道館」

庄内の琴学は「荻生徂徠」と深い関係にある。荻生徂徠は朱子学に立脚した古典解釈を批判し、古代中国の古典を読み解く方法論としての古文辞学（徂徠学）を確立した。
中国の文学や音楽を好んだ徂徠は、『琴学大意抄』という琴の研究書を著している。「琴棋書画」は、江戸後期の儒者（文人）にとってリベラル・アーツのような存在だった。孔子やその門人たちが琴を奏でることを好み、楽器の中で最も重用していたことが『論語』や『礼記』に記述されている。庄内藩における徂徠学の祖は「水野元朗」と「疋田進修」で、江戸在職中に荻生徂徠から直接学んだ。二人の質問に徂徠が答えた直筆の書簡「徂徠先生答問書（致道博物館蔵）」が残されている。以後、藩の多くの儒者が江戸在職中に徂徠の門に学んだことから、この学風は広く藩内に普及した。

藩校「致道館」の初代祭酒「白井矢太夫」の父、白井久兵衛は荻生徂徠の門人だった。矢太夫も28歳の時、江戸に出て徂徠門下の太宰春台に師事している。早くから藩主忠徳に学校の建設を進言していたが、鳥海山麓を視察した折、学校資金に供するため新田の開拓（白井新田）を計画した。1805年（文化2）鶴岡の北郊大宝寺に藩校「致道館」を創立、自ら祭酒（学校の最高責任者で釈奠を司る）兼司業（教育の責任者）となったが、その学風は「徂徠学」だった。



致道館というの名前はは、論語の一部「君子学んで以てその道を致す」に由来する。創設時は「大宝寺」にあったが、1816年、現在の鶴ヶ岡城三の丸の地に移転した。1万5千平方メートルの広大な敷地には、学問所の他に寄宿舎や武術稽古場なども備えられていた。1873年（明治6）に廃校になるまで、藩校「致道館」は多くの人材を輩出した。

庄内の琴士達

江戸時代後期の庄内は「江戸琴学の飛び地」と言われるほど多くの琴士が居た。特に堀季雄（1734～1786年）は、庄内の琴学には注目すべき存在である。1753年（宝暦3）藩主・酒井忠寄の奥小性として召し出されたのを皮切りに、書院目付、郡奉行、鶴岡町奉行、酒田町奉行など藩の重役を歴任した。『承露盤』（酒田市立光丘文庫蔵）『浜荻』『百巻史』など多数の本を著している。江戸在勤中には、徂徠派の高野蘭亭に詩を学び、東皐心越（1639-1696年）直系の「小野田東川」や「鈴木蘭園」に琴を学んでいる。「東皐心越」は、詩文・書画・篆刻など中国の文人文化、特に文人の楽器である古琴を日本に伝え、日本の琴楽の中興の祖とされる。今年（2025年）は「東皐心越禅師没後330年」に当たる。相良儀一は東皐心越の５代後の琴士ということになる。

1775年、鶴岡町奉行だった堀季雄が酒田町奉行となる。酒田は庄内藩の亀が崎城代の統治下にあり、儒学者の上林白水（1729-1792年）の影響下に医者の曽根原魯卿（1749～1811年）などが加わり文人集団が形成されていた。曽根原魯卿も琴を弾じた一人であった。「座琴碑」の相良淑卿（儀一）も酒田の生まれで鶴岡に移る前は亀が崎城で勤務していた。堀季雄は多芸の人であった。茶も学び、碁も強く、俳句も江戸で流行っていたので堪能であった。また、平曲・琵琶を江戸呉服橋の三嶋吉蔵に学び、季雄の二子にも教え共に琵琶を弾じて楽しんだ。堀季雄の娘みわは氏家龍渓（1775-1834年）に嫁した。氏家龍渓（天爵）は相良儀一（淑卿）と盟友で、共に江戸浅草真龍寺のの住職「蘭室」に琴を学んでいる。蘭室は、小野田東川の弟子設楽純如の弟子で児玉空々（1734-1811年）とならび称された。

①
東皐心越
[1639 - 1695]
江戸前期に来朝した中国の禅僧で「琴・詩文・書・篆刻」で高名
↓
②
杉浦琴川
[???? - ????]
宝永年間(1704-1711)に心越の琴曲集「東皐琴譜」を刊行
↓
③
小野田東川
[1684 - 1763]
琴の名人として知られ東皐心越の弾法を後世に伝えた
↓
④
設楽純如
[???? - ????]
東川四天王（幸田子泉・多紀藍溪・杉浦梅岳）の一人
↓
⑤
蘭室
[???? - ????]
江戸浅草真竜寺住職で児玉空々（1744-1811）とならび称された
↓
⑥
相良儀一
[1757 - 1804]
酒田の生まれの庄内藩士で金峯山「座琴碑」で有名

氏家天爵(龍渓)の南画

氏家龍渓（本名剛太夫、天爵とも号した）は、1805年（文化2）藩校致道館司書となり、その後、普請場目付、中間頭、御供目付、大納戸を歴任し、1831年（天保2）官職を辞した。龍渓は、文藝万般に通じた希にみる才人として知られ、絵をよくし、書に通じて致道館版「易経」の版下を書き、篆刻にも優れていた。また琴を弾く名手としても有名である。鶴岡市にある致道博物館には、氏家龍渓が描いた山水画（南画） 2 点が所蔵されている。南画は、中国絵画に影響を受けて江戸時代に成立した主に山水や花鳥を描く絵画で、中国の高官が余技として嗜んだ文人画や、中国江南地方の温暖な風景を柔らかな筆づかいでとらえた南宗画を起源とする。





氏家天爵(龍溪)の琴

鶴岡市にある荘内神社には、江戸時代の歴史的な七絃琴（古琴）が所蔵されている。この七絃琴は、庄内藩士だった氏家天爵の遺品で、明治になって荘内神社に寄贈された。この七絃琴は、神社の宝物として大切に保管されていたため保存状態は良好だったが、七絃琴を演奏可能な状態にして、さらに価値の高い歴史的な遺産にするべく、日本古琴振興会の武井欲生さんに修復を依頼、江戸時代の七絃琴の音色が150年ぶりに復活した。



荘内日報 The Shonai Nippo 2023年（令和5年）10月28日（土曜日）

「十三夜奉納公演」に寄せて

七絃琴復興プロジェクト 山澤 昭彦

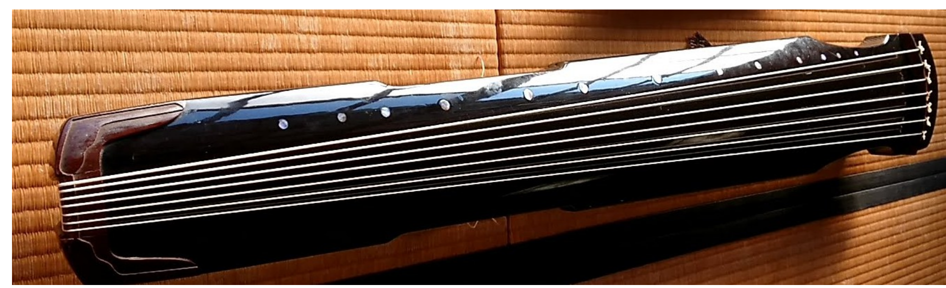
鶴岡市にある荘内神社には、江戸時代の歴史的な七絃琴（古琴）が所蔵されています。この七絃琴は、庄内藩士だった氏家天爵（天保5年没）の遺品で、明治になって荘内神社に寄贈されたものです。文化2（1805）年、藩校致道館司書となった氏家天爵（龍渓）は、文藝万般に通じた希にみる才人として知られ、絵や書にも優れ、琴の名手としても有名でした。

庄内藩の藩学だった徂徠学の始祖荻生徂徠は、中国伝来の琴の名手としても知られていました。徂徠学の影響もあったのか、庄内藩では多くの藩士が七絃琴を弾いたようで、天爵が生きた江戸後期には城下にも琴の音色が流れていたといいます。また、金峯山にある「瘞琴の碑」の存在からも、庄内藩で七絃琴が弾かれていたことがわかります。鶴岡は地方都市では全国的にも珍しい七絃琴の盛んな所だったのです。

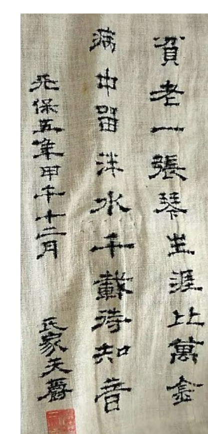
荘内神社に寄贈された七絃琴は、神社の宝物として大切に保管されていたため、保存状態は良好だったのですが、演奏できる状態にありませんでした。「荘内神社」と「七絃琴復興プロジェクト」は、この七絃琴を演奏可能な状態にして、さらに価値の高い歴史的な遺産にしようと考え、日本古琴振興会の武井欲生さんに修復を依頼、今年の5月に絃の張り替えなどの作業を行い、江戸時代の七絃琴の音色が150年ぶりに復活しました。

10月28日（土）には、荘内神社と日本古琴振興会が主催する七絃琴コンサート「十三夜奉納公演」が酒井家入部400年NEXT100の記念事業として開催されます。場所は荘内神社境内。開演時間は午後5時で、入場は無料です。コンサートでは、武井さんが修復した七絃琴で「秋風詞」を披露する他、古琴の国際コンクールで入賞した武井欲生門下（生風流）による歴史的名曲が演奏される予定。また、地元からは荘内神社禰宜の石原和香子さんが笙で共演する他、尺八の山澤昭彦、歌の平山洋之さんが出演します。

荘内神社所蔵の七絃琴を修復した武井欲生さんと荘内神社禰宜の石原和香子さん







琴と尺八と武芸

江戸後期、「石川猪太夫」の剣術、「明石治右衛門」の柔術、「相良十太夫」の槍術は、庄内の三名物だった。中でも、相良十太夫（1739-1798年）は、稀にみる武芸の達人として知られ諸芸にも秀でていた。第5代藩主酒井忠寄の五男「酒井万之助」（のちの近江膳所藩の第9代藩主本多康伴）に槍術を指南した他、刀剣・甲冑の鑑定および横笛・琴・尺八の技にも秀でていたという。江戸後期の庄内藩にも尺八を演奏する武士がいたことになる。江戸時代、尺八は虚無僧と呼ばれる普化宗の僧侶が吹禅と呼ばれる修行に用いた楽器だったが、江戸時代の後期になると、大名や藩士の中にも精神修養や文化的嗜みとして尺八が流行していた。「一音成仏」と言われる尺八は、音を出すだけでも集中力と呼吸法が必要、これは武士の剣術修行と通じるものがあった。「間の美」「侘び寂び」など、日本的な美意識が凝縮されている尺八の音色は、武士にとって心の刀を磨くような存在であったのかもしれない。

琴古流の創始者、黒沢琴古（1710-1771年）は、黒田藩の家臣だったが、若くして普化宗に入り、江戸に上って一月寺と鈴法寺の吹合（指南役）を務めた。全国の虚無僧寺を訪ねて、曲の収集、整理を行い、琴古流として30余りの曲を制定、普化宗尺八の基礎を築いた。

この時代、鈴木晴信（1725-1770年）や歌川国芳（1798-1861年）の描いた錦絵に、「伊達虚無僧」というのが登場する。粋な虚無僧姿がファッションとして大流行したのだ。「助六」と同じ衣装で吉原大門を入る人もいたらしい。関ヶ原の戦いから150年以上が経ち、徳川幕府のもと戦のない平和な世の中が続き、江戸文化が花開いた時期でもあった。





黒沢琴古

初代黒澤琴古（1710-1771年）は、福岡藩（黒田藩）の藩士だった。名前は幸八。1728年（19才）の時、福岡藩と佐賀藩の一年交代で異国船の入港警備にあたる「長崎警護御番」で長崎に長期滞在した折、長崎の虚無僧寺「正寿軒（松寿軒）」で虚無僧一計子から、古伝三曲はじめ七曲（霧海篪、虚空、真嘘霊・前吹盤渉、三谷菅垣、佐山菅垣、波間鈴慕、呼返鹿遠音）を習う。後に浪人して虚無僧となり、全国を行脚。江戸へ出て普化宗両本山（一月寺・鈴法寺）の尺八指南役を勤め、各地の虚無僧寺に伝わっていた尺八曲を整理して今日の琴古流本曲30余曲を制定する。福岡藩の分限帖（藩に所属する武士の名簿）に黒澤姓の者はいないので、江戸に出たころ、縁あって黒沢家の養子となった。黒沢家は秋田藩の家臣。琴古流の「秋田菅垣」は、秋田の虚無僧寺「風袋軒」の梅翁子からを伝授されたと思われる。

東北キリシタンの中心となっていたのは仙台と秋田であった。秋田・横手・湯沢などにはキリシタン関係の遺跡が残る。秋田藩主佐竹義宣は、鉱山（院内銀山）へ流入してきたキリシタンに対し寛大であった。むしろ鉱山発展の重要な労働力とも考え、性急な処刑と追放は控えよ、とさえ指示したこともある。しかし幕府の強い圧力を受けて、1624年、キリシタン取締り奉行梅津憲忠を通し、領内のキリシタンに組織的な弾圧を振りかざすことになった。そして同年、秋田キリシタンの大殉教がおこったのである。

秋田の殉教者



北向き観音像 秋田県横手市

三曲合奏

三曲合奏は、地歌三味線（三弦）・箏・胡弓の三種の楽器による合奏編成、及びそれにより演奏される音楽をいう。古くは「三曲合わせ」などとも呼ばれた。まるで「トリオ・ソナタ」のような合奏形態は、江戸時代の初期に始まる。箏は雅楽などでも使われている楽器だったが、三味線と胡弓の起源については諸説がある。３本の弦や弓の持ち方などから、レベックなどの西洋の楽器がモデルという説もある。明治以降は、三味線・箏・尺八による編成が多くなった。江戸時代、尺八は普化宗の虚無僧のみが演奏できる楽器だった。

伊藤マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンらによる天正遣欧使節団は、1582年に長崎を出発し、インド、ポルトガル、スペイン、イタリア等を回って1590年に帰国、翌1591年に関白秀吉の前で西洋楽器の演奏と歌を披露した。ルイス・フロイスの記述によると、４人はイタリアとポルトガルでそれらを十分に学んでいたので、大変立派な態度で品よく軽やかに演奏した。演奏した楽器は、「クラヴォ、アルパ、ラウデ、ラヴェキーニャ」で、秀吉は、これらの音楽を 非常に注意深く、かつ珍しそうに聞き、楽器を一つずつ自らの手にとって、少年たちにいろいろと質問し、ヴィオラ・デ・アルコとレアレージョ（携帯風琴）も弾奏するように命じた。それらのすべてをきわめて珍しそうに観察し、彼らに種々話しかけ、「汝らが、日本人であることを大変うれしく思う」 と述べた。



應為酔女 筆『三曲合奏図』

鳴門秘帖・虚無僧・隠れキリシタン

吉川英治の長編小説に『鳴門秘帖』というのがある。江戸時代中期、幕府打倒の陰謀が発覚した（宝暦事件）。幕府は、黒幕を阿波の徳島藩主たる蜂須賀重喜とにらみ、甲賀の隠密世阿弥を潜伏させる。しかしそれから10年、世阿弥の仲間の中に真実を知るために阿波潜入を試みる者たちがいた。虚無僧姿に身を包む隠密「法月弦之丞」もその一人だったが、行く手を阿波藩士らが阻もうとする。元阿波川島の原士「お十夜孫兵衛」もその一人。・・・・・・

お十夜頭巾の謎、それはクルスを形どった額の十字の傷だった。弦之丞は突磋に秘帖を半分に裂いて孫兵衛に渡し、幾多の血を流してきた鳴門秘帖争奪の幕を閉じた。弦之丞はまたこういった。「自分は純然たる幕府方の人間のようであって、まことは幕府に忠実な者ではござらぬ。それは今、秘帖の一半を裂いて阿波へ返してやった不審な行為でもお分りになろう」



孫兵衛の母イサベラ様の幾代目かの御先祖、黄金色の髪の毛に愛くるしい琥珀の眼をもった異国娘も、その時、武装した切支丹武士に手をひかれて、阿波の海辺へ上がりました。当時、阿波の御領主は、有名な義伝公で、あのとおり豪邁で、徳川家に楯をついたお方。天草の余党はあの君のお情けで、阿波の奥地へ棲むようになりました。原士の中に七家の切支丹族が今日まで連綿としてきて、しかも、秘密に信仰を保ってこられたのは、ひとつの奇蹟と申されます。マリヤの笄は代々孫兵衛の家につたえられ、仏間と見せかけて実は祈祷の部屋である柱の切嵌めに埋めて、七家のものの信仰の像とあがめておりました。（鳴門秘帖 鳴門の巻）

イサベラ様の幾代目かの御先祖というのは、五十五聖徒の殉教（元和の大殉教）者のひとり、老女ルシヤのつれていた娘。ルシア・デ・フレイタス（日本人女性。薩摩の武士の娘で、ポルトガル人フィリーペ・デ・フレイタスと結婚。長崎にて自宅を宣教師に提供していた。80歳位。火刑者の中の唯一の女性）







キリスト教・普化宗・虚無僧

- 宣教方法は大名を改宗させ家臣や領民に布教
- 江戸の初期まで多くのキリシタン大名が誕生
- 普化宗は虚無僧の集団による特殊な宗派
  - 普化宗には仏教としての教義や信仰上の実態がない
  - 尺八を法器と称して修行や托鉢のために吹奏
  - 虚無僧とは武士の乞食（漂浪の暮らし）
  - 懐剣や添え竹（刀の代わり）を所持
  - 虚無僧は浪人となったキリシタン大名の家臣なのでは
  - 慶長之掟書により組織化
  - 諸国通行の自由など種々の特権を持っていた
  - 虚無僧寺は隠れキリシタンのネットワーク
  - 虚無僧は隠密の役も務めたとも言われる（二重スパイ）

1580年 有馬・安土にセミナリオ創立
1582年 天正少年遣欧使節 出発
1587年 豊臣秀吉 伴天連追放令発布
1590年 天正少年遣欧使節 帰国
1597年 長崎で26名が殉教
1603年 徳川家康 江戸幕府開府
1612年 江戸幕府が禁教令を天領に布告
1613年 崇伝(臨済宗) 伴天連追放文を起草
1614年 慶長之掟書（存在しない）
1622年 元和の大殉教
1628年 虚無宗教団が全国で十六派を数える
1644年 最後の宣教師マンショ小西が殉教
1677年 往古の掟十七ヶ条（幕府公認の獲得）
1700年 臨済宗寺院（興国寺）との末寺縁組み
1705年 普化宗の縁起の創作(虚無僧×尺八×普化宗)
1751年 慶長の掟書の偽造
1779年 虚鐸伝記起稿
1865年 大浦天主堂建立 信徒発見の奇跡
1868年 明治維新 浦上の隠れキリシタン3394人流配
1871年 岩倉使節団 出発（1873年 帰国）
1873年 禁教高札が撤去
1881年 明治政府が普化宗解体

普化宗七派

江戸時代初期の慶長〜元和期には、虚無僧寺は十六派おおよそ百四十ヶ寺あった。

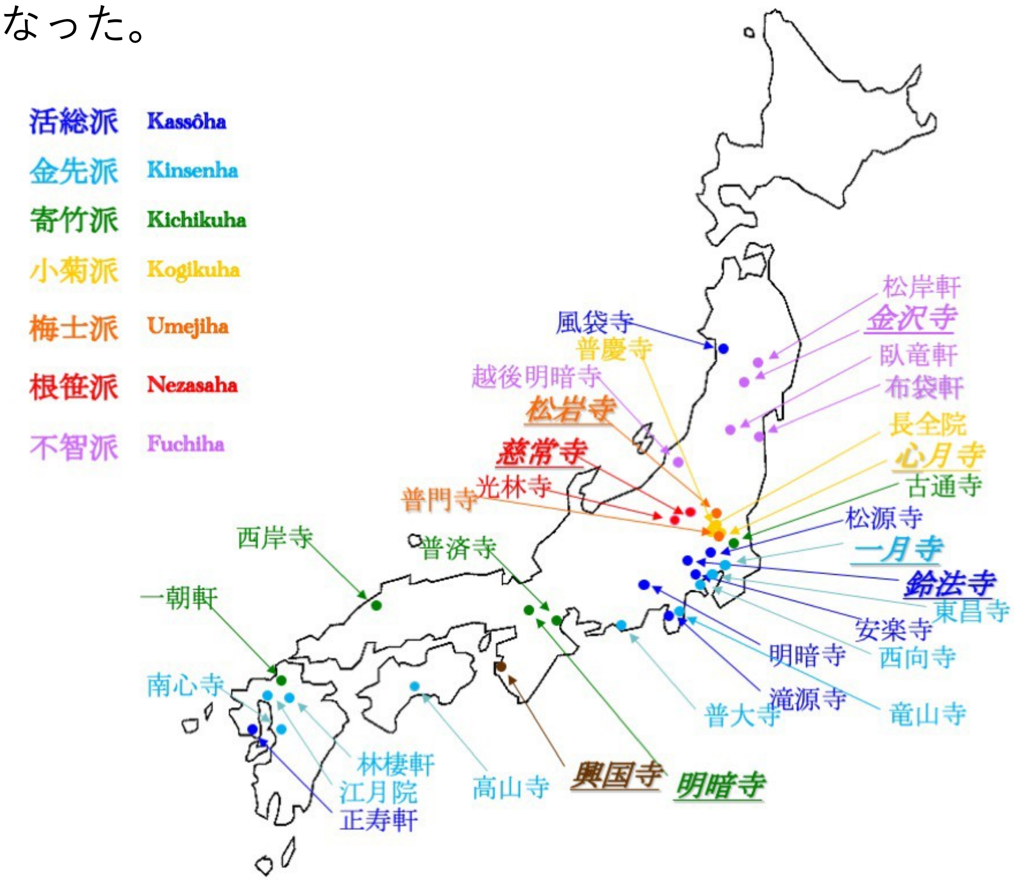
金先・奇竹・梅土・不智・養沢・芝隣・義文・隠巴・宗和・錐南・短尺・野木・児派・括総・小菊・根笹

元禄〜宝暦期に統廃合され七派九十余ヶ寺になった。

浜松の虚無僧寺「普大寺」は、「一月寺」直属の本山として1613年に建立された。古伝三曲など多くの曲を伝承していたが、明治政府が普化宗を廃宗にしたため、普大寺も廃寺となり、寺の本堂は小学校の分校として利用されていた。1888年（明治21）寺の庫裏を仕事場として山葉寅楠がオルガンの製作修理会社「山葉風琴製作所」（現在のヤマハ）を設立。寺跡の高台に行く坂は、「オルガン坂」と呼ばれている。



遠江州敷知郡浜松御城下略絵図



琴古手帳によれば、初代黒沢琴古は19歳の1728年（享保13）「長崎正寿軒」の虚無僧一計子より「古伝三曲」「呼返鹿遠音」などを伝授された。

普化尺八の流派

普化尺八は、寺又は軒別に特徴のある所伝（これを一寺一律と言う）があり、皆一派を形成していたと考えられる。

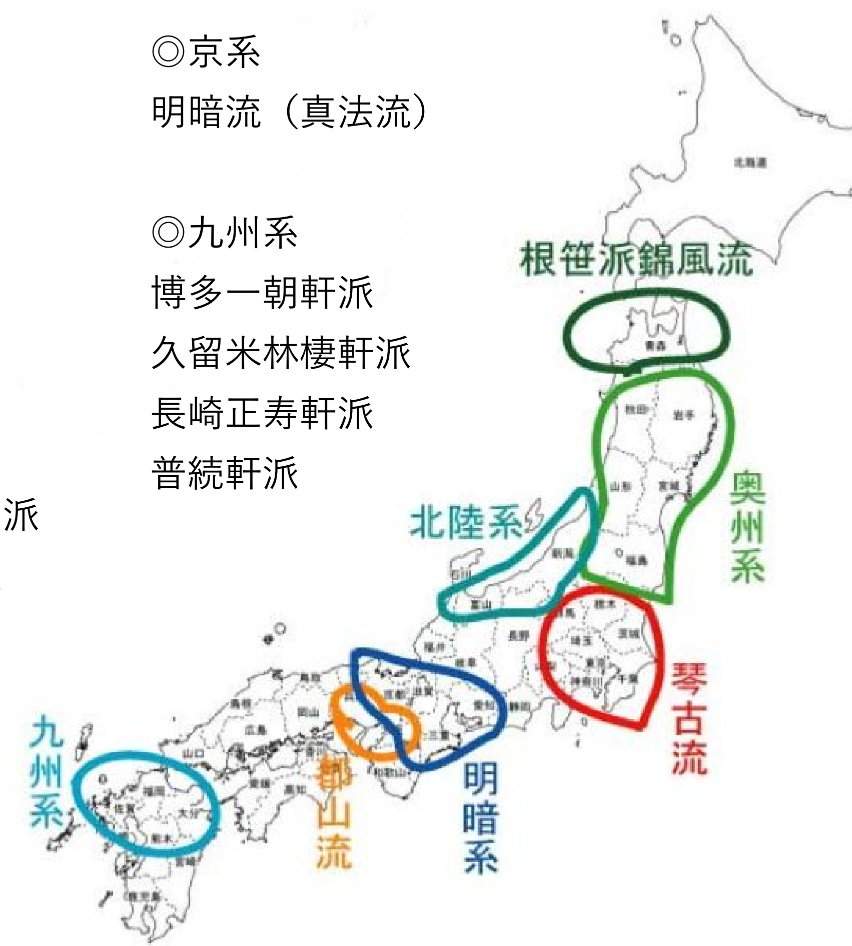
◎東北系
錦風流根笹派
松厳軒派
布袋軒派
臥竜軒派
蓮芳軒喜染派

◎北国系
越後中の原 明晴寺派
越中富山 国泰寺派

◎関東系
一閑流
琴古流
伊豆 竜源寺派
演松 普大寺派

◎京系
明暗流（真法流）

◎九州系
博多一朝軒派
久留米林棲軒派
長崎正寿軒派
普続軒派



虚無僧・虚無僧寺の主な収益

虚無僧は、普化宗を名乗りながらも葬儀や法要などは行わない。寺の維持や個人の食い扶持のために、主にはお布施を乞う托鉢（門付け、辻立ち、乞食行）という方法が用いられた。托鉢の際は二人一組で行う。托鉢や止宿は、江戸中期ごろになると村々にとって、頻繁に虚無僧が来訪したり長居したりすることから大きな負担や迷惑になっていた。また、裏稼業的な方法として風呂屋や尺八指南などがあった。北関東〜奥州の虚無僧寺は殆ど風呂寺で、街道筋の宿場町に多かった。山形臥龍軒の様に風呂用人が別に居るところもあった。

托鉢修道会

1600年、教皇クレメンス8世が、それまでイエズス会のみに認可されていた日本での宣教活動を正式にすべての修道会に認めると、托鉢修道会のフランシスコ会、ドミニコ会、聖アウグスチノ修道会の修道士達がインド・フィリピン等から相次いで来日、各地に教会、修道院、学校、病院等を設置して熱心に宣教に当った。キリスト教の布教は1549年、イエズス会のフランシスコ・ザビエルによって始められたが、1614年の統計によれば、聖職者150名、信徒数は65万で、信徒の中には公卿2家と大名55名がいた。イエズス会と托鉢修道会は、布教する地域などについての対立があったようだ。

ルイス・ソテロ（1574-1624年）は、スペイン帝国セビリア生まれのフランシスコ会の宣教師だった。フランシスコ会は、同時代に設立されたドミニコ会とともに、居住する家屋も食物ももたず、人びとの施しに頼ったところから「托鉢修道会」ないし「乞食僧団」とよばれ、どの教会管区にも属さず、ただローマ教皇にのみ属した。フランシスコ会は、清貧と禁欲の生活を理想としており、貧しいなかで手仕事により生計を立て、不足する部分については他者の喜捨にたよった。1612年に江戸幕府によってキリスト教禁制が公布されると、宣教師の活動は困難になったが、捕縛の危険を顧みずに各地で潜伏しながら信徒たちの世話を続けた。東北地方にキリスト教が広まったのは、慶長遣欧使節として支倉常長と共にスペイン向かったソテロの存在が大きい。ルイス・ソテロは、江戸に滞在していたころから奥州に伝道士を派遣し布教に力を入れていた。



アッシジのフランチェスコ



支倉常長とルイス・ソテロ

奥羽への布教とキリシタンの殉教

奥羽の地へ最初にキリスト教をもたらしたのは、1590年に豊臣秀吉の奥羽仕置に従ってきたキリシタン武将やキリシタン武士たちだった。徳川家康が江戸に幕府を開くと布教の中心はは関東以北となった。東北地方に広くキリスト教が広まるきっかけとなったのは二つの理由がる。一つは、徳川家康が禁教令を出した当初は、まだ東北ではキリシタンへの取り締まりは行われておらず、京や大坂などのキリシタンたちが東北に逃れてきたこと。もう一つは、慶長遣欧使節として支倉常長とスペインに向かったルイス・ソテロ神父の存在がある。最上藩（山形県）でのキリシタン布教は、1612年にソテロ神父から仙台領に遣わされた伝道士たちによって行われ、記録によると約三千人のキリシタンがいた。江戸幕府による1614年に出された禁教令の後は、奥州各地でも多くのキリシタンが殉教した。

庄内藩内の殉教者（1628-1629年）
マテオ孫兵衛、ジョアキムと娘マグダレナとその子シモンとマンショ、ジョアキム覚左衛門とその子三人、ヤコボ六兵衛
トマス茂助と妻マリア、その子フランシスコと某、リノ彌助と妻ウルスラその子マセンシヤとスザンナ、そして男子二人
ディニシオ与八と妻テクラ、娘コリンダとその男子二人





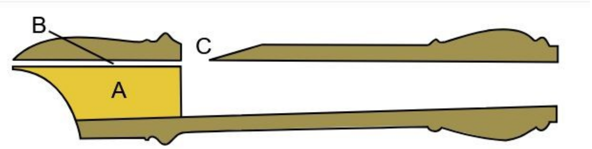
鶴岡カトリック教会（1903年 献堂）



尺八·リコーダー·オルガン

尺八は、口から出す空気を吹き込み口に当ててできる気流（ジェット）で音を出すエアリード楽器で、フルートと同じ原理で音が出ます。リコーダーもエアリード楽器ですが、リコーダーの内部は図のような構造になっており、息を吹き込むと、ウィンドウェイという細い道を通ってラビューム（エッジ）という障害物に当たるようになっています。このラビュームに息が当たると空気の振動が発生し音が出ます。パイプオルガンのフルー管も、エアリードにより発音する管群で、音が出る仕組みはリコーダーと同じです。





リコーダーの頭部管断面。Aはブロックまたはフィップル、Bはウインドウェイ、Cはエッジなどと呼ばれる。図の左端から吹き込まれた空気はBを通り、C付近で流れが不安定になり、振動が発生する。



日本で制作された竹オルガン

パイプオルガンは紀元前にエジプトで作られ、1世紀頃のローマ皇帝・ネロも好んだという。次第に改良が進み、教会で使われるようになった。日本へは1579年、巡察使ヴァリニャーノが口之津へ上陸した際に携えてきた2台のパイプオルガンが最初と言われている。天草コレジヨ館には、1590年頃に天草の画学舎（キリシタンの美術学校）で作られ、主要な教会に備え付けられたという竹製パイプオルガンが復元展示されている。



16世紀末天草志岐で作られたオルガン
天草コレジヨ館 蔵
古楽器製作家 平山照秋 復元制作

竹製パイプオルガンとは、パイプの部分に竹筒を使用し、後部に付いている鞴から風を送り込んで2人で演奏するもので、2人の息が合わないとちゃんとした音が出ない。特に後ろで風を送り込むのが大変だったそうで、当時ヨーロッパでは、弾く人より鞴係の方が、給料が３倍高かった。竹オルガンの音は、尺八に似た優しい音色。オルガンの歌口はリコーダーと同じ構造だ。

「あのパイプオルガンはリコーダーなんですよ」平山照秋

セミナリヨの音楽教育

1549年、フランシスコ・ザビエルがキリスト教を広める為、鹿児島に上陸。2年間、九州、中国地方を中心に布教活動を続けた。1582年には信者数が15万人に達したといわれている。安土セミナリヨは正にその頃建てられた神学校である。建立に尽力したのタリア人神父のオルガンティノで、1570年に九州天草の志岐に上陸、ルイス・フロイス神父と京都で布教活動を行った。



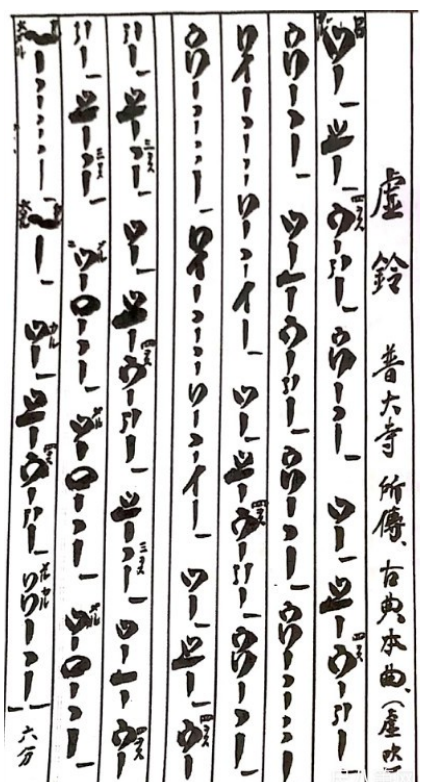
セミナリヨの教育制度は、宗教、語学・文学、美術の3つの柱によって他の人に仕える人間を育てることを目的としていた。ラテン語を中心にラテン文学と日本文学が並置された。日本文学のテキストとしては「平家物語」が用いられた。安土セミナリヨには日本最初のオルガンが設置された。もう１台のオルガンは、有馬のセミナリヨに置かれた。安土は日本で最も早く洋楽の調べが鳴り響いた地でもある。楽器は他にヴィオラ、フルート、クラヴォがあった。安土のセミナリヨは信長の庇護を受けて神父たちと信長の交流が続き、信長もセミナリヨを再々訪れ、生徒の演奏する音楽に聴きいったという。本能寺の変の後は京都に移されることになったが、京都は地所が狭かったため、高槻に移された。高槻のセミナリヨには、オルガンティーノ神父をはじめ、安土で学んでいた神学生たちも移ってきた。1585年、セミナリヨは大坂に移転、さらに、1587年に豊臣秀吉が出した禁教令（バテレン追放令）により九州に移転された。九州の有馬セミナリヨは1612年まで継続、生徒数は100人を超えていた。
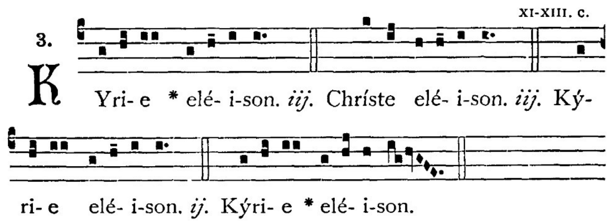
巡察師ヴァリニャーノが定めた「セミナリヨ内規」 による全寮制の生活の時間割

04:30-05:00 起床 祈祷 ミサ 清掃
06:00-09:00 ラテン語の勉強
09:00-11:00 食事・休憩
11:00-14:00 日本語の読み書き
14:00-15:00 グレゴリオ聖歌の練習 楽器演奏の練習
15:00-17:00 ラテン語の勉強
17:00-18:00 夕食・休憩
19:00-20:00 ローマ字の勉強
20:00-20:30 聖母の連祷 就寝
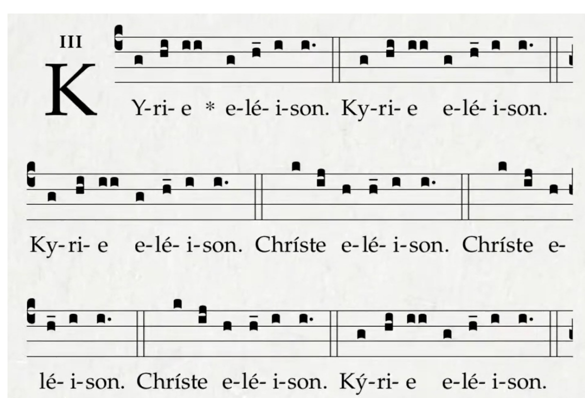
本曲「虚鈴」＝聖歌「キリエ」

古伝三曲の中で最も古い曲とされる。普大寺伝、琴古流の真虚鈴の他、明暗流の本曲として同名異曲で数種類存在する。同じ普大寺伝のものでも京都明暗寺では高音から始まり、神如道伝では低音から始める。伝承の違いから、いつ頃変化したのか興味深い。虚鐸伝記国字解によれば、中国唐の時代の普化禅師が振った鐸の音を模して、張伯という人物が縦笛で吹いたのが起源とされている。





(A) Kyrie eleison;
(B) Christe eleison;
(A) Kyrie eleison.



「キリエ」は聖歌の歌詞として非常に人気があった。226のグレゴリオ聖歌の旋律が残されており、そのうち30は『リベル・ウズアリス』（特によく歌われるものを編纂したグレゴリオ聖歌集）に収められている。もっとも古い形と考えられている聖歌では、同じ旋律が8回繰返された後、その変形が最後に歌われる（すなわち、AAA AAA AAA'の形をとる）。こういった繰り返しは、ローマ数字を用いて、 "iij" （3回）や "ij" （2回）などと示される。『リベル・ウズアリス』に収められるレクイエムミサのための「キリエ」ではこの形がとられている。より後代の「キリエ」では、AAA BBB AAA' や AAA BBB CCC' 、あるいは ABA CDC EFE' など、より複雑な形式をとっているが、ここでも、最終行は常になんらかの変形を施されている。